

編集後記

関連学会も一通り終り、また新しい意欲を持って、毎日の診療、研究にとりかかられたことと思います。

第1号をご覧になれば、この雑誌の当初の目的であった、写真をできるだけ多く、生のものに近くという目的がほぼ達せられていることにご満足いただけたことと思います。ちっと見つめていると1枚の写真の語る内容にただその写真の説明を読んだだけのことでなく、そこまでの写真にまでした多くの人の努力の結晶をも感じとられることでしょう。

とにかく同じく医学部を卒業したわれわれの仲間がやっていることです。ただ見事だと眺めるだけでなく、自分もやってやろうとの熱意を持つ人が一人でもふえることを望みます。早期癌の診断もある限られた人等のものではなく、広く多くの人等の手の届くものとしてこそ本当の意味を持つと考えます。

第2号でも第1号に続いてその道の達人が卒直にX線、内視鏡の問題点を述べておられます。パイオニア方の長い努力をその行間、写真から感じとっていただければ幸いです。

なお、本号から早期癌研究会で討議された症例を引続きのせてゆく予定です。村上教授の発刊のことばにもありますように、この雑誌を刊行するにいたった第一の動機ともいえるこの会の雰囲気の皆様が少しでも分っていただければと思います。また早期癌研究会とは関係なく、教訓的な症例は随時発表させていただきます。

技術解説はとりあえず、胃カメラとレントゲンについて、もっとも初歩的なことから説明を始めることにしました。したがって分りきったことをと思われる方もあるかもしれませんが、その点は1人でも多く、診断レベルの高い人を得たいというわれわれの願いですからおゆるし下さい。

座談会は印象の新たなうちにと消化器病学会の最終日に行なわれましたが、時間が十分でなく、お互に意を尽せず、また日を改めて行なうことになっております。

<芦沢真六>

<編集> 早期胃癌研究会